

□ 器楽(室内楽を含む)

渡 辺 和

2014年の佐村河内守ゴーストライター騒動のような社会を賑わす大騒動はなかったものの、2015年のクラシック音楽界も決して平穏な年とはならなかった。

器楽室内楽界でなくとも特筆されるべきは、神戸国際フルートコンクール存続騒動である。2014年度末頃、30年の歴史を持ちフルート単独コンクールとしては世界でも貴重な存在だった同大会を、主催する神戸市が財政難を理由に中止の方針を示した。以降、神戸市民やコンクール優勝者を含む世界のフルート奏者らの存続に向けた活動が活発化。10月市議会では久元善造市長が「公費投入の優先順位が低い事業は市民、企業などで負担をしていただくことが基本」と言明した。11月20日に市側はそれまでの発言を一転、財源の見通しが立ったと2017年開催を発表する。結果的に、市民や音楽家の努力で存続が叶ったわけだが、運営の今後には未だ不透明な部分も多い。

日本で開催される国際コンクールが資金不足で存続の危機に瀕するのは、神戸だけではない。2006年にフィレンツェから八王子に移ったガスパール・カサド国際チェロ・コンクールも、2013年第3回以降は最大のスポンサーとなっていた地元企業の経営悪化が表面化、次回開催に暗雲が垂れ込めた。2015年には市民によるNPO法人が支援コンサートを開き、なんとか2016年開催の見通しが立ってきたという。

行政や企業の支援ストップ声明に対し、演奏家や地元市民が活発に活動することで存続の道を探すことになった両大会を巡る動きは、日本の音楽文化の成熟と未成熟の両面を顕わにしたと言えよう。なお、11月23日から12月7日に開催された第9回浜松国際ピアノコンクールが、アジア地区を代表する独奏ピアノのコンクールのひとつとして水準の高い安定した大会運営を行い、大きな成果を上げている。

あまり大きな議論となっていないが、自主リサイタルの数が非常に多い器楽室内楽界として無視出来ないのは、所謂「劇場・ホール2016年問題」である。公共民間を含め、利便性の高いホールが改築や改修、使用耐久年切れとなり会場としての使用が不可能になり、慢性的な会場不足が表面化しつつあるのだ。ポップスやミュージカルでは大問題で、年末にはこの問題を巡りシンポジウムが開催され、クラシック関係団体も議論に参加した。

クラシック業界としては、室内楽やリサイタルの会場として盛んに活用されていた東京千駄ヶ谷の津田ホールが、所有者の大学側の事情で4月に使用中止になったことの影響がジワジワと広がっている。規模も適切で公共交通機関からのアクセス至便、大学施設故に使用料も手頃だったので自主リサイタルやシリーズ演奏会会場としていた音楽家や演奏団体は、同館の穴を埋める会場を必死で探すことになる。結果として、2011年から室内楽フェスティバルを開催し室内楽会場としての認知を得たサントリーホール・ブルーローズや、主催公演を止め貸ホールに徹する運用の変更を行った溜池のJTアートホールなどの使用頻度が高まった。また、東京都歴史文化財団が積極的に主催公演を行うようになった上野の東京文化会館小ホールも、民間小ホール全盛期には些かの陰りを感じさせたものの、東京の室内楽拠点として再び注目を集めている。

そんな会場難の問題の対応策として、器楽リサイタルを中心に会場小規模化の流れが定着してきたのは興味深い現象である。一昔前にはサロン・コンサートやアマチュア発表会の会場と見做され、プロ演奏家による本格的リサイタル会場としては殆ど注目されなかった200席から100席、はたまたそれ以下の規

模の会場で、メジャーな演奏家がリサイタルを開くようになりつつある。ムジカーザ、ソノリウム、オペラシティ近江楽堂、両国門天ホールなどが、一昔前の文化会館小ホール的な活用のされ方をするようになってきたのは、より親密な音楽を求める(些か否定的な言い方をすれば、趣味や興味が蛸壺化しつつある)聴衆の嗜好の変化も影響しているのであろう。

会場小規模化の最も顕著な例として、横浜市鶴見区のサルビアホールで開催される「クアルテット・シリーズ」が挙げられる。地元主催者横浜楽友会と指定管理者の共催で、極めて響きの良い100席のホールに、シーズン中にはほぼ毎月、世界の若手から長老までの弦楽四重奏団が次々と登場する。2011年に始まってわずか4シーズンで、世界中の室内楽関係者に知られる類のない贅沢な室内楽シリーズに成長した。オープン当時は規模の小ささが心配されたハクジュホールが安定した活動を行っていることも、こうした傾向を証しする事例であろう。

首都圏外では、札幌駅前に六花亭が運営する221席の室内楽専用ふきのとうホールが7月に竣工、岡山潔を音楽監督に若手のクアルテット・ベルリン・トウキョウとゼッパール・トリオをレジデント団体に迎え、活発な活動を開始している。名古屋の宗次ホールは、勢いは衰えを知らず、京都の音楽サロンとして新たな室内楽の拠点とありつつあるカフェ・モンタージュ、積極的に室内楽セミナーなども開催する大阪ザ・フェニックスホールなど、リサイタル会場の小規模化・サロン化は、ひとつの時代の潮流として捉えられるべきであろう。なお、諸外国では新たな潮流となりつつあるネットに拠る小型携帯端末へのライブ配信を前提とした最新ハードウェアとしてのコンサートホールへの動きは、ザ・シンフォニーホールの新オーナーが関心を示しているものの、日本ではまだ本格化していない。

以下、器楽室内楽リサイタルの動向を駆け足で概観する。所謂メジャー演奏家による大規模会場でのリサイタルは例年の如く多数開催され、内田光子(11月)、ペライア(9月)などが安定した演奏を披露した。世代交代も顕著で、来日が予定されたチッコーリーニが逝去、数年前から巨匠としての世界中で高く評価されるようになったメナハム・プレスラーの来日キャンセル、中村絃子の体調不良などの一方、ピーター・ゼルキン(9月)やエマニュエル・アックス(11月)など、一昔前は日本での評価が無条件に高いとは言えなかったアメリカ系ピアノリストが巨匠として扱われるようになったのは興味深い。なお、年末から新年にかけて日本に長期滞在したツィメルマンのように、忙しい来日ツアーとは異なるコンサートライフを実践する巨匠クラスが出現しているのは興味深い。

日本の中堅どころでは、長期自主リサイタルを堅実に続ける小山実稚恵や、鈴木理恵子とのデュオも含め意図的に小規模会場での演奏会を重ねる若林顕、古い時代のピアノへの関心を深める仲道郁代など、活動の個性化が目立つ。若手演奏家としては、小菅優のベートーヴェンの取り組みが光った。また、シヨパン・コンクールで盛り上がる年の通例として、優勝したチョンジンが久々の大型本格派として関心を集めるだけでなく、唯一ファイナリストに残った日本人で、既に天才少女としてのキャリアを積んでいた小林愛美の結果に日本のファンが一喜一憂した。なお、佐村河内騒動で注目を浴びた新垣隆が才能を認められ、室内楽奏者や音楽パフォーマンティとして一気に人気者になったのは音楽界として皮肉な現象である。

最後に、2015年で特筆すべきは鈴木ファミリーの大活躍である。古い時代の音楽がすっかり定着、日本でそんな動きの中心を担った鈴木雅明は、今や小澤征爾を越え日本で最も活発に世界のメジャー・ステージに登場する音楽家となっている。チェロの鈴木秀美も指揮者活動を本格化するばかりか、小規模会場でのレクチャー&リサイタル、弦楽四重奏やトリオでの演奏など、八面六臂の大活躍。また、雅明の息子優人はオルガニストとして世界中で活動するばかりか、11月には東京芸術劇場開館25周年記念演奏会の実質的なプロデューサーを任せられ、オルガニストから指揮者までの多彩な才能を舞台に展開した。